

---

# シネマ七日間地獄

伊之口浩作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シネマ七日間地獄

### 【Nコード】

N1881A

### 【作者名】

伊之口浩作

### 【あらすじ】

高校生の作る映画なのに、今回作る映画は普通じゃない！！風画シリーズ記念すべき第一弾！

## 第一幕 奈落でのワンシーン（前書き）

おもしろくなかったらゴメンね。  
眠気覚ましになれば幸いです。

（ー、ー、）ノ

## 第一幕 奈落でのワンシーン

一人の男が人生の岐路に立たされていた。

適度に逆立てた髪が、湿った風に弄ばれる。

かなり大柄な男は、物憂げな瞳をしていた。

「まさか、ここまでくるとは……」

男は唇を噛み締め、ただ一点を凝視していた。

「……もう、あの頃には……、戻れない……」

一筋の涙が、男の頬を濡らした。

悲しみに打ちひしがれる男の背後に、一人の女の影が近寄る。

「やっぱり、ここにいたんだ……」

端正な顔立ちにモデル並みのボディライン。彼女は紛れもない美人だった。

女は男に近寄る。

「み、美奈……?」

男は振り返り、女の顔を見た。懐かしい顔を見た男の目から、大粒の涙が溢れ出る。

「美奈ッ。俺は……、俺はッ……」

うつむいて涙を流す。

そのおり、シリアスな情景に相応しくない声が響く。

「カット、カット、カットオ！ ダメだよ、こんなじゃあ！ やる気は有るのかよ！」

黄色いメガホンを手にした男が、二人の間に割って入る。

一六〇センチ程の痩せ型、異様なまでにやつれた頬と不健康極まりない色白な顔。肩幅が狭く、インドアを絵に描いた様な容貌の男は、眉間に皺と血管を浮かべて二人のもとへ歩み寄った。

「ふざけるなよ！ そんな演技が通用すると思ってんのかよ！ この大根役者！」

絞った様な声で、二人を怒鳴り散らす。

「この演技下手！ もっと、まじめにやれ！ 遊びじゃないんだぞ！」

痩せ男は二人を交互にメガホンで叩く。

「だあゝ。さつきから偉そうに！」

大柄な男は、痩せ男の胸倉を掴んで激しく揺すった。

「こっちは善意で協力してやってんだぞ！ わかるか！ ボランテイアだよ、ボランテイア！ なのにさつきから黙って聞いてりやいい気になりやがって！」

「お、ウプツ。ぐぬぬ……」

痩せ男の顔はみるみるうちに蒼白し、頭はぐわんぐわんと縦横無尽に揺さぶられた。

「ちよつとやめなつて」

モデル体型の女が割って入り、大柄な男を羽交い締めにして制止しようとする。しかし、男の体格がかなり良いため、思う様にいかない。

「うらあ！」

大柄な男は、痩せ男を強引に突き放す。痩せ男は五メートル程突き飛ばされ、床に大の字になった。

「立てや！ てめえの腐りきった性根を鍛え直してやる！」

「風画クン止めて！」

モデル体型の女は、大柄な男を諭すように言い、必死の思いで制止しようとする。

「離せ！ コイツには、道理ってモンを一から叩き込みにゃきゃ……」

……！ 離せ、美奈！」

モデル体型の女を引き剥がそうとするが、相手が女性なので強引にやる事が出来ず、男は色々と難儀した。

「槍クン！ 黙って見てないで助けてよ！」

モデル女が視線を逸らすと、その先には眼鏡を掛けたオールバックを男がいた。

オールバック男は渋々立ち上がり、尚も暴れ続ける男のそばまで

来る。

「風画。もうその辺にしておけ」

オールバック男は、大柄男の肩をポンポンと叩いた。

「うるせえ！ あの野郎、もう許さんぞ！」

事の発端は、数日前まで遡る。

「映画の撮影？」

帰宅ムード満点の教室で、疑問を露わにした男が声を挙げた。

かなりの長身に筋骨隆々な体つき。適度に痩せた頬に少々黒めな肌。一際ワイルドなこの男は、名を白狼風画といい、公立高校の二年生である。

「そうなんですよあ。ですからね、是非、我々の作る映画に出演いただければと思ひましてね。どうでしょう。引き受けてくれませんかね？」

やたら腰が低い割に、随分と馴れ馴れしい口調の男。彼は名を羽村直哉という。

「いきなりのごことで申し訳ないんですが、若干の人数不足でして……。協力して頂けると嬉しいんですがねえ……」

巧妙に語尾を濁し、同情を誘い協力させようとする。お世辞にも誠意があるとは言えない勧誘法だった。

「うーん。どうしようかなあ……」

風画は腕を組み考え込む。

「無理にとは言いません。出来ればいいんです、出来ればで……」  
俯き加減になり上目遣いで風画を凝視する。その視線からは「やつてくれるよねえ」という、見えない脅迫が注がれていた。

「わかりました。そちらにも事情というものが有りますね。今回は、どうもすいませんでした」

直哉はくりりと振り返り、教室を後にした。

「何か、悪いことしちゃったかなあ……」

風画は言い知れぬ後味の悪さを感じていた。

「ま、いいか。さあて、部活だ部活！」

風画は肩をぐるぐる回しながら、教室を後にする。

「……………」

教室から出た途端、彼は背後から強烈な視線を感じた。

（まさか……）

風画が振り返ると、そこには、眼鏡を掛けたオールバックの男がたたずんでいた。オールバックの男は、名を藤樹槍牙という。ちなみに、風画と槍牙はバスケットボール部で幼稚園からの幼なじみだ。風画を口から、安堵の息が漏れる。

「なんだ槍牙か。驚かすなよ」

風画は破顔一笑した。

「俺は何もしていない。それよりどうした？ 借金取りから逃げ切ったような顔をして」

槍牙がそう言うのと、風画は何事もなかったかのように答えた。

「いやね、悪質なキャッチセールスに捕まったような、そうじゃないような」

いつもと何ら変わりの無い、明るい口調はきはきと答える。

「そうか。一つ言わせて貰うが、悪質じゃないキャッチセールスなぞこの世に存在しないぞ」

槍牙はそう言うのと、風画を追い越した。

「先に行っている」

「ああ……。いつ！」

風画の視線の先。先ほどまで槍牙が遮っていた視界の中に、謎の視線の正体があった。教室のドアから顔を半分だけ出し、脅迫めいた視線で風画を見る。

「あ……。ああ……」

気付いたときには、書類に判が押されていた。

「別に、無理にとは言っていないのに。まあ、でも、ありがとございます」

風画はまんまと、直哉の術中にはまってしまった。

余談ではあるが、風画と同じ方法で、槍牙とモデル女（河合美奈）も出演者として登録されてしまったのである。



## 第二幕 修羅場へのクランク・イン

「こんにちは。今回の映画撮影で監督・脚本を務めることとなった、映画研究部部长、二年の羽村直哉です」

風画達が半ば強引に出演者となった翌日。彼らは校舎の最果てにある空き教室で整列させられていた。

風画達と同じ境遇であろうか、浮かない顔の生徒が風画達の横に並んでいる。出演者一同は二列縦隊で並ばされ、直哉率いるスタッフ等と対面するような形で整列していた。

一方、彼らと対峙するスタッフと言えば、そろいも揃ってなよなよした感じの連中である。総勢十名ほどの映研部全員は、直哉とさして変わらない体型で、皆色が白く肩幅が狭い。強風でも吹こうものなら、あれよあれよといっている間に吹き飛ばされてしまいそうな面々であった。

「えー、ではまず、今回の撮影に携わるスタッフの紹介です」

直哉がそう言うと、直哉以外の映研部が一步前に出た。

「佐藤孝則です。撮影を担当します」

全くと言っていいほど抑揚の無い口調でそう言った後、部員のさやかな拍手が聞こえた。

「飯岡です。音響をやります」

またも似たような口調で言った後、先程と同じような拍手が聞こえた。

「山野です。大道具と美術をやります」

「大久保です。小道具担当です」

「笹山です。会計担当です」

映画製作への旗揚げ式だと言うのに、ほとんど覇気が感じられない。今後の制作状況が危ぶまれる。

スタッフ紹介が終わり、直哉が出演者挨拶と銘打って出演者の紹介が始まった。

「白狼風画です。映画の撮影とかつて初めてなんで、分からないことだらけですけど、よろしくお願いします」

自己紹介としては平凡な口上だが、覇気が微塵にも感じられない映研部の後では、高名な政治家の演説にすら聞こえた。

「藤樹槍牙と申します。宜しく願います」

「河合美奈です。ヨロシク」

出演者挨拶は滞りなく終わり、最後に直哉が口を開いた。

「えー。以上、スタッフ十名。出演者十五名でこれからやっていきますが。皆さん、最後まで元気に頑張りましょう」

『オー』

覇気のある返事と、無い返事が半分ずつ。足取りは好調とは言い難かった。

前途多難な船出式が終わると、監督から出演者に台本が手渡された。A 4版でかなり分厚い台本の表紙には、『人欲の輪廻』と印刷されており、言いようのない重厚感が滲み出ていた。出演者一同は台本をパラパラとめくり、内容に目を通す。

「ん……？」

台詞と台詞の間にある、人物の動作や音響の指定が事細かに書かれた文。ト書きに目をやった風画は、その内容に目を見開く。

B『Aさん……。私……』

Bがすすり泣いた直後、Aの秘書がAを蹴飛ばす。

秘書『この、鬼畜野郎！』

Aは激昂し秘書を拳銃で撃つ。

秘書『ぐはあ……。貴様、何故こんなことを……』

秘書は吐血。

Aは秘書を見下し、更に発砲。

始終こんな感じだ。高校生の作る映画にしては、少々というかか

なり重い。

風画は顔をしかめて、更にページをめくり続ける。

BはAに駆け寄る。

B『これで、遺産は全て手に入っているのね』

Aは引きつった笑みを浮かべ、Bに銃口を向ける。

B『何する気』

Aは躊躇うことなく引き金を引く。

A「これで、遺産は全て俺のものだァー」

警察「そこまでだ。魔の天才詐欺師め」

風画は読むのを止めた。重すぎたのである。

「美奈。俺ら本当にこれやるの？」

美奈は風画の方に向き直って言う。

「やだなあ。これ……」

気が乗らないのは仕方ない。高校生の映画と言うより、火曜サスペンス劇場である。

「はああ。配役はどうなるのかな？ どの役もやりたくないけど」  
重いため息を放った後、風画は室内を見回した。

「あれ。監督は？」

手近なスタッフを捕まえて尋問するが、スタッフは『知らない』の一点張りだった。

「ったく。監督のクセにどこ行ってるんだよ」

風画が不平を漏らした直後、教室の戸が勢いよく開く。そこから現れたのは、体格こそ同じだったが、明らかにいつもとは違う服装の直哉であった。

「ちゃっちゃと配役決めて、さっさと撮影始めっぞ！」

直哉は茶色のベレー帽を被り、一昔前のサングラスに黄色のメガホンという出で立ちだった。

スタッフ以外の誰もが言葉を失う。

風画はまたもやスタッフを捕まえ、「なんだアレは？」尋問した。  
「ああ。いつもこうなるんですよ」

どうやら、撮影時の恒例行事のようなものらしい。気合の入りようとキャラクターの変わりぶりから見て、彼にとってのユニフォームなのだろう。

「さあ、配役決めだ」

直哉の一言に促されて、出演者達は黒板の方を向く。

「あん？何をやってんだ君らは？」

風画はすぐさま答えた。

「配役決めでしょ。だからこうしているだけ」

「何を言ってるんだい？」

「いや。だから、黒板に役を書いて、みんなでこれがいいとか、あれがいい……」

風画が言い切る前に、直哉の大声が響き渡る。風画の耳元にメガホンを近づけ、大声で怒鳴りつける。

「バカ野郎！ 小学生じゃないんだ！ そんなちまちま決められるか！」

あまりの大音量といきなりの出来事にひるみ、風画はその場にしがみ込む。

「配役は監督である俺が全て決める！」

直後、出演者からの大ブーイング。

「黙れ！ 貴様らは初心者なんだよ！ 初心者は初心者らしく、プロの意見に従え！ それが嫌なら、今すぐ出てけ！」

十数名の役者の猛抗議を意にも介さず突っぱねると、直哉は一人ひとりを指差す。

激昂する直哉を見て、スタッフの一人がうなだれた。

「始まつちやったよおー。監督の『ワンマン映画』が……」

スタッフがうなだれる中、出演者の一人が口を開いた。

「ちっ。調子にのりやがって」

不平を漏らし椅子を蹴ると、直哉を力一杯睨んで部屋から去る。

「フン！ 俺のやり方が気に食わなかったら、さっさと辞めればいい！ 他に辞めたいヤツは、さっさと辞めちまえ！」

直哉がそう言くと、最初の者に倣うかのように新たに2人の出演者が退室した。

「さあ！ 配役決めだ！ あんたは勘当息子役ね！」

直哉はそう言って、風画の肩に手を置く。彼の言葉には強烈な意思が籠もっており、条件を飲まなければ人質を撃つ、という様な凶悪犯の様だった。

「どうした！ ボケツとするな！ これだから初心者は！ 第一幕一景、『豊橋十一郎大往生』のシーンからだ！ 大道具、早くしろ！」

前途多難とは、正にこのことである。

### 第三幕 鬼の仕組みし破滅への罠

撮影が始まったが、風画は協力的になれなかった。その大きな理由の一つが、監督の独裁ぶりである。

「カアットオ！ そんな演技じゃダメだ！ 撮り直しだ！」

すぐさまスタッフが俳優に駆け寄り、台詞とト書きの確認をする。「確認……。完了しました……」

いつにも増して消え入りそうな声。監督の気に障るうものなら、例えスタッフと言えどもクビにされかねない。彼もそんな監督に怯え、ビクビクしているのである。

「さっさと撮影しろ！ グズめ！」

至近距離で直哉に怒鳴られ、一瞬たじろぎながらも、必死にキョー出しする。

「はい。テイク14。用意。……」

カチツ。

軽快な音の直後にカメラが回る。

「ご主人様の遺産の分配方法をお伝えします」

執事役の生徒は、綺麗に置かれた上白紙を丁寧に広げつつ重々しく言った。

「読み上げます」

他の出演者達は、執事役の生徒をじつと見詰める。撮影現場は水を打ったかのように静まり返った。

「我が遺産は、養子の……」

執事役が言い切る前に、直哉の怒鳴り声が響いた。

「カアットオ！ いい加減にしろ！ 貴様なぞもう要らん！ さっさと帰れ！ この知恵遅れのちんちくりんが！」

撮影当初からこの調子である。

散々ダメ出した挙げ句、『今すぐ帰れ！』の決まり文句。こんな監督では、十人が十人非協力的になるのは必至だろう。現に、も

う役者の半数は辞めている。

「ああ、解りましたよ！ もう辞めだ！ やってらんねえよ！」

執事役の生徒は激昂し、付け髭と白髪のカツラを取り払って足元に叩きつけた。

「じゃあな！ あんたらもさっさと辞めた方が利口だよ！」

部屋に残る他の役者に八つ当たりをする様な形で捨てぜりふを吐くと、彼は頭から湯気を出しながら部屋を後にする。

「フン！ あんな奴がいても、予算と時間の無駄だ！ 居なくなつて清々したわ！」

直哉は腕を組んでふんぞり返った。まるで、然るべき仕事を、然るべき対応で迅速に解決して悦に入っているようだった。

横暴な態度を取る直哉に我慢の限界が来たのか、一人のスタッフが小走りで直哉に近付き喰ってかかる。

「監督。その制作態度を改めて下さい」

いつもは頼りないスタッフだけに、この行動は一同の目を引いた。「監督の采配で、まだ二日しか経っていないのに、八人の役者がクビですよ。ただでさえ、頭数の要る映画なのに……」

普段の数倍勇ましい彼に、風画は心の中で精一杯の拍手を送る。

「もう少し、冷せ……い……になつてくだ………」

彼のなけなしの勇氣は、直哉の凄まじいオーラによって粉々に打ち崩された。

「冷静に、なんだ」

「いや、ですから……」

いつも通りの消え入りそうな声で返す。いや、今回はそれすらをも上回るような小さな声だった。

「貴様あ！ オレの映画作りに対する文句か！ ああ！」

直哉はかなりの大声で怒鳴り散らす。

「ちが、違います。ぼくはただ、今の状況を……、き、客観的に……判断した……だけです……」

直哉の剣幕に押され、今にも泣き出しそうな声で答える。

「黙れ！ 大道具の分際で生意気な！ 貴様なぞもつ要らん！ さつさと帰れ！」

直哉の決まり文句が炸裂した。しかし、彼は踏みとどまる。

「いやです。監督が、制作態度を、改めない、限り、帰りません」

彼の確固たる決意は、てこでも動きそうになかった。今にも泣き出しそうな表情だったが、目に宿る信念は折れる事無く、直哉に向けられている。

しかし、直哉はてこではなく、ブルドーザーを持ち出した。

「くるわい！　ちつちと帰れ！」

直哉は大容量のペンキ缶を、彼の頭目掛けて放った。

ペンキ缶は見事に彼の頭にすっぽりとはまり、直後、大量のペンキが滝のように流れ落ちる。

直後、ペンキ缶の中で反響する、くぐもった叫声。

「うわああああん！　こんな映画を作りたくて、ここに来たんじゃなあい！」

彼は空のペンキ缶を被ったまま走り出した。だが、視界が遮られていたので、彼は壁に激突する。その場で尻餅をつき、立ち上がるとともにペンキ缶の投げ捨てた。

「うわああああん！監督なんて死んぢやえええええええ！」

彼は一瞬のうちに姿を消した。

放課後ということもあり、校内にいる生徒は少なかったが、運が悪ければ彼は翌日から『ペンキ男』と呼ばれることだろう。

「おい。さっさと撮影を再開しろ！」

直哉は啞然とするスタッフ達に檄を飛ばす。

「あの、監督。今のでこのシーンに欠かせない役がいなくなっちゃったんですけど……」

スタッフの一人が、直哉の顔色を伺うように言った。

「ちつ。じゃあ、休憩だ。休憩！」

直哉はそう言い残すと、そそくさと部屋を後にした。

「ふう。やつと休憩か……」



風画は重く長いため息をついた。

風画は昇降口最寄りの自動販売機の前にいた。

「どれにしようかなあ」

小銭をちやらちやらとポケットのなかでいじりながら、自販機のディスプレイに並ぶ見本缶を眺める。

「よし。これ」

コイン投入口に小銭を入れ、オレンジジュースのボタンを押した。直後、取り出し口に一本の缶入り飲料が出てきた。

「あ、なんだこれ!？」

風画は缶コーヒーを手にしていた。しかも、缶のセンターには『無糖ブラック粗挽き 特攻玉砕風味』とでかでかと表記されている。しかも、『超力フェイン』とまで銘打つてある始末だ。何を基準に『超』を名乗るかは不明だったが、その重厚感は凄まじいものであった。

「ちつ。槍牙じゃあるまいし、こんなん飲めるか」

風画は憤慨しながらも、力無く立ち尽くす。

そのおり、風画の背後から足音が聞こえてきた。

「？」

風画が振り返ると、そこには槍牙が立っていた。風画同様、ポケットの中で小銭をちやらつかせている所から察するに、彼もジュースであろう。

「槍牙か。ほれ、コーヒー飲むだろ？」

風画はそう言つて、槍牙に先程のコーヒーを投げ渡した。

「おお、すまない」

槍牙は風画から受け取ったコーヒーを開け、それを飲み始めた。相当な苦みなのはパッケージからして解るが、槍牙は全く気にせず飲み続ける。

「はああ。大丈夫かな？ 映画」

風画は重いたため息を放ち、その場に座り込んだ。

「どうだろうか」

槍牙は感慨深げに言う。

そのおり、校舎中に直哉の罵声が響いた。

「貴様なぞもう要らん！ さっさと帰れ！」

二人は直哉の声に驚き、声のした方を向く。

「行くか？」

「ああ」

槍牙は空の缶を自販の脇の屑籠目がけて放り、風画と共にその場を去る。

風画達が部屋に戻ると、直哉とスタッフの一人が至近距離で睨み合っていた。

風画が戻ったところで、美奈が二人に駆け寄る。

「早く！ 二人を止めて！」

美奈の指さす先で、二人が睨み合っていた。

「わかった。槍牙、行くぞ」

風画はそう言って、槍牙を従えて二人に詰め寄った。

「貴様あ！ スタッフの分際で！ 殺すぞ？」

「殺せるもんなら殺して見ろよ。てめえみたいな根性無しに殺せるか」

「言っただな？ 言っただな？ 本気で殺すぞ？」

「ああ、やれよ。できるもんならな」

事態は一触即発だった。互いに相手を挑発し、今にも殴りかかるうとする。

「おい、二人とも。止めとけって」

風画が静止するも、二人は止めようとしなかった。

「死ね。死ね。今すぐ死ね。要らない」

「口だけかよ。情けねえな」

「うるせえよ。死ねよ。殺すぞ？」

「来いよ。ビビってんのか？ あ？」

二人の溝が更に深まる。

「なあ、聞こえてんのか？ 止めろって、意味無いって」

風画が必死に諭すも、二人には届いていなかった。

そのおり、直哉がスタッフの顔面に右ストレートを放った。スタッフの彼は空かさず応戦し、直哉の腹に蹴りを入れる。

「おい。やめろ！」

風画の静止も虚しく、二人の様子は益々激しくなっていた。

蹴りが飛び、拳が舞う。だんだんとエスカレートする二人には、

風画の言葉が聞こえるはずもない。戦闘が激化するのは、目に見えていた。

「いい加減にしろよ！」

風画はそう言っ、先に手を出した直哉を突き飛ばす。

「喧嘩なんかするな！ みんなで協力しろ！」

風画は大声一括し、その場の空気を一気に引き締めた。

「おい、監督！ お前はこの映画の監督だろ？ キャプテンだろ？ だったら、お前が先に手を出すなよ！ しっかりみんなをまとめやれよ！」

直哉はふてくされた態度で悪態をつく。

「フン！ 出演者の分際で！ 揃いも揃って反抗か！ 言い度胸だな！」

直哉はそう言っ、風画に食ってかかる。

「なあ。あんたもこいつがうざいだろ？ だったら、一緒に殺そうぜ」

直哉とやりあっていたスタッフが風画の耳元で呟き、風画を仲間にしようと誘う。

「もういい！ 貴様も要らん！ さっさと帰れ！」

「今だ！ 殺せ！」

二人が同時に言っ、風画はまたも声を上げた。

「黙れ！ いい加減にしろ！」

風画は二人を引き離し、互いの顔を交互に見詰めた。

「みんなで協力しないと。バラバラになったら、何も生まれないって。な？」

諭すように言う風画。

しかし、風画の思いとは裏腹に、二人の機嫌は直ることなく、更に険悪になった。

「うるさい！ うるさい！ うるさい！ もう誰も要らん！ 全員死ね！」

直哉はそう言って、教室を飛び出した。直哉が教室を去った後も、直哉が壁に当たり散らしながら悪態をついていた。

直哉が去ると、今度はスタッフが風画の腕から逃れた。

「余計なことすんなよ」

スタッフはそう言って、教室を後にした。

風画が啞然としていると、残りのスタッフ達のざわつきが聞こえた。

「風画クン……。どうしよう……」

美奈が風画のもとに駆け寄り、不安げな表情で言う。

「分からない」

風画はそう言いながら、首を横に振ることしか出来なかった。

スタッフ達のざわつきが終わる。すると、スタッフ達は教室を去ろうとした。

「おい。どこ行くんだよ」

風画がスタッフの一人を捕まえる。すると、スタッフは力無く言った。

「もう、おしまいだよ。みんな、あんたのせいだ」

風画はそこに立ち尽くし、呆然とすることしか出来なかった。

「風画……、お前のせいではない」

槍牙が風画に駆け寄り、風画の事を励ますが、風画はしゅんとしてしまっていて元気がない。

教室に残されたのは、風画と槍牙と美奈と、大量の撮影機器と大道具と小道具。

教室の中は冷たく重苦しい空気が漂い、それがその空間を支配していた。

#### 第四幕 倒れし閻魔と蜘蛛の糸

風画は今日の撮影に行くべきか行くべきではないかについて思案していた。

「どうしようか……」

帰りのHRが終わり、廊下の窓から空を眺める。

そのおり、風画の背後から風画の名を呼ぶ声が聞こえた。

「ふうがクン。なにしてんの？」

声の主は美奈だった。

「美奈か……。いやね、今日映画行くか行かないか考えてた」

風画がそうこぼすと、聞き覚えのある、深く渋い声が響いた。

「お前らしくないな。いつもだったら、真っ先に行くと思うが」

声の主の槍牙は、缶コーヒを啜りながら言った。

「槍牙……。そうだな、行こう」

風画は重い腰を上げたかのように撮影現場へと向かう。美奈と槍牙もそこへと向かった。

「ちわす」

風画の声に元気はなかったが、あながち、かなり弱っていると言うこともなかった。

乱雑に置かれた撮影機材や衣装や道具などはほとんど昨日のままで、時間が止まったようだった。

「来たか」

教室の前面中央にある監督椅子に直哉が座っていた。

直哉は三人が来たことを確認すると、いそいそと撮影準備を始めた。

「昨日の続きからだ。早く準備しろ」

三人は黙って従った。

撮影が始まった。今回は風画がメインのシーンらしい。

風画は物憂げな視線で感慨深げに言う。

「まさか、ここまで来るとは……」

唇を噛みしめたただ一点を凝視する。

「もう……、あの頃には……、戻れない……」

風画が涙を流す。

自在に涙を流すという芸当は、かなり訓練しないと出来るものではないが、今の風画の鼻の中にはタマネギが詰められているのだ。

泣く風画の背後から、美奈が近付く。

「やっぱり、ここにいたんだ……」

美奈は更に風画に近付く。

「み……、美奈……」

風画は振り返り大粒の涙を流す。タマネギが相当効いているようだ。

風画は俯いて涙を流す。

そのおり、直哉の声が響く。

「カット、カット、カットオ！ ダメだよ、こんなじゃあ！ やる気は有るのかよ！」

直哉が二人の間に割ってはいる。

「ふざけるなよ！ そんな演技が通用すると思ってんのかよ！ この大根役者！」

絞った様な声で、二人を怒鳴り散らす。

「この演技下手！ もっと真面目にやれ！ 遊びじゃないんだぞ！」

直哉は二人を交互にメガホンで叩く。

そのおり、風画の堪忍袋の緒が切れた。

「だあ……。さつきから偉そうに！」

風画は直哉の胸倉を掴み、これでもかと言うほど激しく揺すった。「こっちは善意で協力してやってんだぞ！ わかるか！ ボランティアだよ、ボランティア！ なのにさつきから黙って聞いてりゃいい気になりやがって！」

風画は、統率力がなく自分の要望ばかりを人に突きつけるような態度に憤慨してのだろう。

「おお……、ウブツ……。ぐぬぬ……」

直哉の顔はみるみる蒼白し、頭は縦横無尽に揺さぶられる。

「ちよつとやめなつて」

美奈は風画を羽交い締めにして制止しようとするが、風画の体格が良すぎるため思うようにいかない。

「うらあ！」

風画は直哉を強引に突き放した。

直哉は五メートルほど突き飛ばされ、床の上に大の字になった。

「立てや！ てめえの腐りきった性根を鍛え直してやる！」

「風画クンやめて！」

美奈は風画に諭すように言い、必死の思いで制止しようとする。

「放せ！ コイツには道理ってモンを一から叩きこまにや。放せ、美奈！」

風画は美奈を引き剥がそうとするが、相手が女性なので強引にやる事が出来ず、風画は色々と難儀する。

「槍クン！ 黙って見てないで助けてよ！」

美奈の視線の先には槍牙がいた。

槍牙は渋々立ち上がり、風画の側まで来た。

「風画。もうその辺にしとけ」

槍牙は風画の肩をポンポンと叩いた。

「うるせえ！ あの野郎、もう許さんぞ！」

気付いている人も多いと思うが、これは第一話の冒頭の部分である。

「何をしとるんだ！ ボケ！」

新しい人物が現れた。

一七〇センチくらいの身長でやせ形だが、腕には屈強な筋肉がついている。

「大磯先生！」



男の顔を見るなり、直哉が素っ頓狂な声を上げた。

大磯と呼ばれたこの男は、この学校の体育教師であり、元プロキックボクサーである。

学校に『キックボクシング部』の新設を唱え、過激さは生徒の間でも有名だ。

「羽村！ 何だこの様は！ 『良い作品を作る』とお前が言ったから顧問と資金援助を引き受けたんだぞ！ もっとしっかりやれ！」  
「はいっ！ すいませんしたっ！」

直哉はいつの間にか立ち上がり、大磯に深々と頭を下げた。

「いいか！ 今度の『高校映画祭』で優勝しなかったら、俺は顧問を辞めるからな！」

大磯はそう言って教室を後にする。

「あつ。先生待つて」

直哉は大磯に縋り付こうとして後を追う。すると、直哉は撮影機材のコードに脚を引っかけ、周りのセットと共にその場に崩れ落ちた。

「羽村！」

大磯が直哉を救出しようと、崩れた機材の山を掻き分ける。

「羽村！ 大丈夫か！」

救出された直哉はぐったりとしている。

「おい！ 救急車だ！ 早く！」

数分後、高校に救急車が到着し、直哉と大磯がそれに乗り込み病院へと向かった。

「全治一ヶ月だそうだ」

直哉が病院に運ばれた翌日、風画は職員室で大磯の話に耳を傾けた。

「左腕の上腕とあばら骨三本を骨折。左大腿骨にひび。左の膝の靱帯とアキレス腱を断絶。治るまでは立つことすらままならない」

風画は静かに聴いていた。

「白狼。いきなりで済まないが、羽村の映画作りを引き継いでくれないか？」

「えっ!？」

いきなりの事に風画は戸惑いを隠せなかった。

「羽村はな、映画を作ることが生き甲斐みたいなヤツなんだ。一生懸命すぎるあまり、つい熱くなってしまう。それは誰にだって言えることだ」

「はあ」

「羽村は俺のクラスの生徒で、俺に顧問になってくれと切り出してきた。俺は快く引き受けられなかったけど、アイツの熱意は本気で、絶対に良い物を作りますって俺と約束した。それで俺は、アイツに色々と手を貸してやったんだ」

大磯は一息ついてから、更に続けた。

「羽村は映画以外にはほとんど取り柄のない男だったから、俺もついついアイツに協力的になってた。それで本題なんだが、アイツの映画を引き継いで欲しい。映画祭には既に登録してしまったし、俺もアイツも本気だったから中途半端で終わりたくないんだ。俺に出ることなら何でもやる。だから、頼む」

いつの間にか、大磯は頭を下げていた。

ここまでされて断るほど、風画は人の道を外れてはいなかった。

「分かりました。俺にやらせてください」

風画はそれを引き受けた。

「風画クン。それ、本気？」

風画は槍牙と美奈を呼び、映画作りを引き継いだ旨を二人に話した。

「ああ、本気だ。二人には悪いと思っているけど、どうか協力して欲しい」

風画は二人の顔を交互に見詰める。  
最初に口を開けたのは槍牙だった。

「分かった。手伝おう。お前の頼みなら断る理由がない」

槍牙に続き、美奈が口を開く。

「私もやる。手伝わせて」

風画は内申戸惑い気味だったが、二人の答えを受けてホッとしたようだった。

「ありがとう」

風画が微笑みながら言った。

「ところで風画クン。どんな映画を作るの？」

美奈に言われて我に返る風画。どうやらそこまでは考えていないらしい。

「う~~~~~ん」

風画は腕を組み黙考する。

そのおり、廊下を雑談しながら通る生徒の話し声が聞こえてきた。

「昨日の『少林サッカー』観た？」

直後、風画はインスピレーションを感じた。

「これだ！」

風画は黒板にでかでかと文字を書いた。

「俺等の作る映画はこれ」

風画は自信満々な表情で誇らしげにする。

「どうよ？」

黒板にはこう書かれていた。『少林バスケ』と。

**第五幕 冥土を逆らう（前書き）**

パクリ入ってます

## 第五幕 冥土を逆らう

「よっしゃあ。取りあえずちゃっちゃとやっていくぞ！」

風画を新監督にして再始動した映画制作だったが、相変わらず問題は山積だった。

一つに、風画は映画初心者であること。二つに制作期間が一週間しかないということ。三つに役者とスタッフ不足。四つに資金問題。映画を作る上でのありとあらゆるトラブルを全て抱え込んだ形だった。

「風画。映画を作る上での絶対必要条件はあるか」

「ああ、あるよ。映画は三〇分以上六〇分以内のものであること。盗作は禁止。そんなとこだな」

風画の簡潔過ぎる返答に槍牙が喰ってかかる。

「おい、ちよつと待て。そんな簡単なわけがない。もっと色々あるだろう。資金や機材の制限とかだ」

槍牙に指摘された風画は、すぐさま手元の書類に目をやった。

書類を睨むこと数十秒、風画は口を開いた。

「うゝん。問題ない問題ない。資金は三〇万までつてあるけど、大磯先生に貰ったのは一〇万ちょいだし。機材の制限は難し過ぎてわかんねーし。ま、取りあえず大丈夫でしょ」

風画はそう言つと、槍牙の肩を大袈裟に叩いた。

「それより、脚本はどうする？」

槍牙の新たな問い。

「ないよ」

風画は全く動じることなく答えた。

『えゝゝゝっ！』

槍牙と美奈が同時に叫んだ。

「脚本なしの映画など聞いたことがない！」

「そつだよ。もっとちゃんとやろつよ！」

風画は二人の猛抗議に一瞬ひるんだが、すぐさま切り返した。

「ちよつと待て。取りあえず俺の話を聞け」

風画は二人を黙らせ、自分の意見を二人に説き始めた。

「俺はこの映画をバスケの試合メインでやりたい。バスケの試合は四〇分、休憩やタイムアウトを入れればもつと長くなるけど、それは大した問題じゃない。必要なのは派手で人間離れたプレイのシーンだ。それ以外はこれまでの練習試合なんかの映像を切って貼って間に合わせにする。派手なシーンの撮影方法も大体固まってる。それになにより時間がない、二人の事を信じている。頼む、最後まで付き合ってくれ」

風画は深々と頭を下げた。

「頭上げる、風画」

槍牙に言われて風画は頭を上げた。

「私とお前の仲だ。地獄の底まで付き合おう」

槍牙は力強くガッツポーズ。

「風画くんは信じられるから、最後まで手伝うね」

美奈は両手を風画の肩の上に置いた。

「槍牙……、美奈……」

風画は二人の名を呟いた。

「よし。二人とも。一緒にやるぞ！」

『オオオオオオ！』

三人が一斉に鬨の声を上げた。

## 第五幕 冥土を逆らう（後書き）

他に比べて短いなあ、これ（第五幕のこと）

## 第六幕 追いかけてきた鬼（前書き）

「発想を生かし切れていない」とのコメントを貰い、それについて色々と思案してみました。解決出来ていなかったらすみません、はい。



## 第六幕 追いかけてきた鬼

映画撮影は二度目に出港式を終え、新たな船出を迎えた。

「まずは役者とスタッフだな」

槍牙が言った。

「心配すんな。ちゃんと考えてある」

風画達は体育館に向かっていた。二人が体育館に到着すると、風画は勢いよく体育館の大戸を開け放つ。

「なるほど」

槍牙がぼつりとこぼす。

体育館の中にはバスケット部員が勢揃いしていた。

「みんな聞けーい」

風画の号令に部員全員が振り向く。

「お前等に協力して欲しいことがある」

風画はそう言って、映画作りの旨を話した。

「よし。じゃあ、みんな！ 気合い入れてはじめっぞお！」

『おおおおおお！』

部員全員が関の声が上がる。

風画の権威と部員からの信頼の成せる技だった。

「よっしゃあ。そうと決まれば早速撮影準備だ！」

風画はそう言って重々しい撮影機材を運び始める。

「みんな、とりあえず撮影は明日の放課後から始めるから、うちのチームのユニフォームの上下を忘れないで」

重々しい機材を、体育館に併設された部室に運ぶ。

「しゃあ。とりあえず今日は部活すつぞ。気合い入れてけよー」

リーダーシップの有るものと無いものとは、現場の雰囲気になり違ってくるものだ。役者の顔も自然と明るく見えてくる。

「槍牙。楽しくなりそうだな！」

風画が槍牙の肩を叩いて言った。

「ああ！」

槍牙は力強く答えた。

翌日の放課後、『少林バスケ』の撮影が開始された。

「まずは『ジャンプボール』のシーンからだ」

風画は昨日作った監督用の脚本を見ながら言った。

「槍牙。脚立とエバーマット」

風画が助監督の槍牙に指示した。槍牙は黙って従う。

そのおり、一人の部員からの物言い。

「ちよつと待つて。ジャンプボールのシーンなのに、なんで脚立なんだ？」

風画はその部員の方を見て答えた。

「普通のジャンプボールじゃ面白くない。だから、今回は『跳ぶ』じゃなくて『飛び降りる』にする」

「えっ？」

部員が困惑してる間に、脚立とエバーマットの準備が整った。

「風画。準備完了だ」

「よし。撮影開始！」

カチッ。

カメラが回った。

キャッツウオークから放たれたボールが落ち始め、それに合わせて役者が脚立から飛び降りる。

「カアットオ！ オーケー、オーケー。ナイスナイス！ 良いのが撮れたよ」

風画は椅子から立ち上がり、コート中央のサークルに居並ぶ役者達に歩み寄る。

「よし！ ジャンプボールのシーンは終了！ 次は『ファイヤーダック』のシーンだ！」

ダンクシュート。言わずと知れたバスケの醍醐味である。ボールをリングに叩きつけるようにして打ち込む豪快なシュートである。風画はただでさえ豪快なダンクに『ファイヤー』という単語をくつつけた。

「このシーンは俺が出る。みんなは適当に散らばってくれ」

ユニフォーム姿の風画はそう言った後、手のひらで押しのける様なジェスチャーをする。

「槍牙。特製ボールの準備」

風画に指示された槍牙は、何やら意味ありげな物を取り出した。

「これは？」

部員の一人が意味ありげな物を指さし風画の方を見る。

「特製ボールさ。使えなくなったバレーボールに新聞紙を巻いて灯油を染みこませてある」

風画は特製ボールの説明をしながら、厚手の革手袋をはめた。

「槍牙。取り決め通りだ。頼むよ」

「了解」

見ると、槍牙も厚手の革手袋をはめている。

「気を付ける。俺のシュートコースにいるとマジでやけどするぞ」

風画はそう言って、「どいて」と手で指示する。

「よし、安全確保。槍牙、火い付ける」

「点火完了」

槍牙は右手に持ったボールにライターで火を付ける。

「来い」

風画は走り出し、槍牙に手のひらを向ける。

直後、槍牙からのパスが通り火球が風画の掌中に収まる。

だんっ。右足で着地。

だんっ。左足で跳躍。

風画の体は重力に逆らい上昇し、風画と接するもの全てが虚空に躍り出る。

火球は火の粉を撒き散らしながら燃え続け、風画の腕の動きに従

う。

「おりゃあ！」

風画は右腕を一八〇度回転させ、燃えたぎる火球をリングへと叩きつけた。

『おお』

「見事」の一語に尽きる豪快なダנק。現場に感嘆の声が漏れた。「熱い、熱い。早く消化器を！」

風画は今だ燃え続けるボールを片手でお手玉しながら小刻みに跳ね回る。

ぶしゅーっー。

槍牙が消化器の薬剤を風画に向けて放った。

もうもうと立ちこめる薬剤の霧の中から、全身真っ白になった風画が現れた。

「フィルムは！？」

真っ白になった風画はカメラの方を見た。

カメラの側には誰もいなかった。

「うそ……」

先程の見事なダנקはおじゃんになったようだ。

「もしかして……、取り直し……？」

風画は皆の方を見た。

こくこくと、槍牙が静かにそして残酷にうなずいた。

「よし、オッケー」

カメラが回ってないというハプニングに見舞われながらも、なんとかファイヤードランクの撮影は成功した。真っ白になった風画と、風画の右手という名の犠牲の下に。

「よし。じゃあ次は、『威圧感あるアップ』のシーン」

風画はタオルで顔を拭きながら言った。

「とりあえず、全員整列して。五列ね、五列」

風画の体は白いままで、顔だけが普通の色合いだった。

「槍牙。お着替えタイム」

「うむ」

槍牙はそう言って、ステージ裏へと消えた。

「お着替え？」

部員が風画に質問する。

「ああ、特注の衣装が有るんだ」

風画がそう言うと、ステージ裏から槍牙が現れた。

「おおお……！？」

部員一同言葉を失う。

槍牙の出で立ちを簡潔に言い表すなら『禍々しい軍服』といった感じだった。

「風画。お前本気か？」

部員の一人が食ってかかる。

「問題ない問題ない。それに、アイツもアイツで乗り気だからな」

風画がそう言ったのを知ってか知らずか、風画の後に槍牙が重々しい声を出した。

「さあ。やるぞ！」

部員は呆然とした様子だった。

「な」

風画は部員の肩に手を乗せた。

「よし、良いのが撮れた。槍牙、名演技だったぞ」

収録テープのチェックをしていた風画は、コートの中の槍牙にOKサインを出した。

「よし、今日の撮影はここまで。みんな。明日もよろしくね」

「お疲れさまでしたー」

「お疲れー」

部員達がぞろぞろと部室へと向かう。

「槍牙、ちよっと」

風画が槍牙に手招きする。

「どうした」

未だ軍服姿の槍牙は風画に近付く。

「大変なことになった」

風画は重々しい口調で言った。

「どう大変なんだ」

槍牙が訊いた。

「派手シーンがもうない」

俯き加減に加えて消え入りそうな声で言う。

「なっ……。どうする気だ。派手シーンメインでやると言ったのは風画ではないか」

槍牙の語気は自然と強くなっていた。

「だからお前に相談してんだよ。何かアイデア無い？」

手のひらを合わせ、すぐるような視線で槍牙を見る。

「うゝむ。とりあえず部室に戻ろう」

槍牙はそう言って部室に向かう。

「あっ、おい。待てよ」

遅れを取った風画は、駆け足で槍牙の後を追った。

## 第六幕 追いかけてきた鬼（後書き）

なんだか長いな。引っ張るだけ引っ張っという尻すぼみってのは避けたいです。

第七幕 三途の川のあの世側（前書き）

パクリ多いなー。てゆうか、長過ぎじゃん、これ。



## 第七幕 三途の川のあの世側

風画達が部室に戻ると、他の部員達は既に部室にいた。

風画は他の部員を押しつけるようにして自分のロッカーへと向う。彼が自分のロッカーを開けると、そこには見慣れない水色の紙袋があった。

「はて。なんだこれは？」

袋の中身を見ると、中にはマンガと紙切れが入っていた。紙切れを手に取り中を見る。

『借りてたマンガ返します。ありがとうございます』

原口

風画は心の中で大きくうなずいた。

（そうだ、原口に『ス ム ン』を貸してたんだ）

風画は何気なくマンガを手に取り、適当にページを開いてみた。

「おお。ここは……」

偶然開いたページには、主人公の桜 花 が相手選手に『脳天ダシク』をかましているシーンだった。

「道も無茶するよな」

風画がぼそつとこぼした直後、窓際の部員が声を上げた。

「おい見ろよ。野球部の奴らが何かしてるよ」

見ると、野球部の生徒がグラウンドの真ん中で何かしていた。

全員が一カ所に集まり、中央の生徒を揉みくちやにしている。

「なにしてんだあいつら」

風画がそう言うつと、風画の隣にいた別の二年生が言った。

「そついや、試合でデッドボールになったときの乱闘の練習をするとか言ってたな」

その台詞の直後、風画の脳内に二つの単語が浮き上がる。

『脳天ダシク』

『乱闘』

風画の脳内の二つの単語からニヨキニヨキと腕が生え、互いにが

「つちりと握手するのが風画には見えた。」

「これだあ！」

風画は突如大声を上げ、窓際にたかった人ばかりを押しつけつつ、なんとか自分のロッカーに辿り着いた。

「どうした？」

遠巻きに野球部の乱闘を見ていた槍牙が訊いた。

「来た来た来た来た北北北北キタ。次のテーマはこれだあああ！」

風画は紙袋に書き殴ったメモを槍牙に見せた。

「『脳天ダंक』『乱闘』。これが一体どうしたんだ？」

槍牙は風画に問いかけた。

「フッフ、俺の映画の新たな見せ場だよ。明智くん」

「誰が明智だ。誰が」

かくして、『少林バスケ』の撮影は新境地へと踏み出したのであった。

**第七幕 三途の川のあの世側（後書き）**

十話位で完結します。

## 第八幕 逆三途渡り（前書き）

五話くらいから、サブタイトルがいい加減になってきてますが、あまり気にしないで。

## 第八幕 逆三途渡り

マンガと野球部によって新たな発想を得た風画は、翌日も撮影を始めた。

通常の部活を早めに切り上げ、残りの時間を撮影に充てる。

いつものように部員（役者）を整列させ、風画が皆の前で挨拶した。

「えー。今から皆さんに乱闘していただきます」

部員一同哑然としずつこける。

「お前はバル・ワヤの北武かー!!」

部員からの猛ツツコミ、そして何故か大ブーイング。

「待て待て、暴れる前に俺の話を聞け」

風画は皆を黙らせ、今回の撮影の旨を話した。

「……というわけだ。みんな、協力してくれ」

風画が会釈する。

「ま、良いよな、別に」

どうやら部員の理解は得られたようだ。

「よし。じゃあ、早速始めよう」

風画はそう言ってメガホンを手にした。

コートの中に部員が散らばり、風画の指示を待つ。

「うん、こんな感じだな。進矢は槍牙の手を踏み台にして、高く跳んでくれ」

風画がそう言うと、進矢と呼ばれた部員はこくりとうなずいた。

「見せ場だからな。カメラマンはコースを確認。迫力有る映像を頼む」

風画はそういって、各所に配置されたカメラマン全員に目で合図する。

「危険なシーンだから一発で撮りたい。みんなの協力が大事だ。し

「つかりやつてくれ」

風画の呼びかけに皆が応じ、各々自由に返事をする。

「じゃあ、始めっぞ。テイクワン。用意、アクション！」  
カチッ。

全三台のカメラが一斉に回る。

進矢が走り出した。

槍牙の手に踏み込む直前、味方のプレイヤーからのパスを受ける。槍牙は片膝をつき、両手を重ねてタイミングを見計らう。その時の槍牙の姿勢は、レシーブをするバレーボール選手によく似ていた。パスを受け取った進矢はそのまま着地。そして、踏み切りの一歩を槍牙の手に。

進矢の左足を受け取った槍牙は、進矢の踏み切りに合わせて両手を上に押し上げる。

進矢の体が空中にふわりと浮いた。

進矢の跳躍の直後、敵のディフェンダーが跳躍する。

「はあー！ー！」

進矢はディフェンダーの脳天目がけて強烈なダンクを放った。使用したボールはウレタン製なので、ディフェンダーへのダメージは殆ど無い。

衝撃を喰らいディフェンダーの顔が歪む。衝撃を吸収したウレタンのボールは、歪な形に変形した。

後ろ。横。正面。三台全てのカメラにその模様が克明に記録された。

ディフェンダーはそのままの姿勢で落下し、背中から地面に落ちる。落下の直後、あらかじめ口内に仕込んで置いたムースを吐き出し、あたかも泡を吹いたかのように見せる。

槍牙はカメラに写らないよう、器用に移動する。

倒れたディフェンダーに味方の選手が近付き介抱する。

「おい、大丈夫か」

ディフェンダーは動かない。

「てめえ、この野郎!!」

ディフェンダーの味方の選手が、進矢の胸倉を掴む。

(そうだ。そこで殴れ!)

台本通り、ディフェンダーの味方が、進矢の顔面を殴った(様に見える)

「よし。カットオ。オッケーイ。ナイスナイスナイス! 皆さん名演技でした」

風画は頭上に両手で輪を作った。

「いいぞ。次は乱闘のシーン」

『少林バスケ』の撮影は佳境に入った。

## 第八幕 逆三途渡り（後書き）

伏せ字が多いですね、この作品。



## 第九幕 生還のクランク・アップと、本当の地獄（前書き）

『シネ七』もいよいよ佳境に入って来ました。サブタイトルの「  
本当の地獄」とは、編集作業のことです。

## 第九幕 生還のクランク・アップと、本当の地獄

「カアツトオ！ 名演技だったぜ！ これにて全撮影日程全て完了！ みんな、お疲れ様！」

風画は両手を大きく振った。

撮影が始まってから四日、全てのシーンを順調に撮り終え、残る作業は編集のみであった。

「さあて、後は編集だけだ！」

役者が全て出っ払い、風画と槍牙だけになった体育館の真ん中で、風画は肩を回しながら言った。

「槍牙あ。最後の仕事だ。編集作業手伝ってくれ」

風画はくると振り返ってから言った。

「ああ、分かってる」

槍牙は大きくうなずいた。

「ん！ じゃあ、よろしく！ フィルムは全部俺の家に置いてある。今夜来れるか？」

「問題ない」

「じゃあ！ 行くな槍牙あ！」

風画は大きくガッツポーズし、意気揚々と体育館から引き上げた。

風画と槍牙は、風画の自宅にいた。

「まずは飯だな」

風画はそう言って、いそいそと飯支度を始めた。

風画の母親は、風画がまだ幼いうちに亡くなり、父親はどこぞの企業の重役で毎日のように海外を飛び回っており、普段は家に風画一人なのである。

風画には兄と弟がいるが、兄は既に自立し、弟は数年前に親戚の家に養子という形で貰われている。

「槍牙。何喰いたい？」

風画は冷蔵庫を漁りながら言った。

「チャーハン」

「よしきた！」

風画は冷蔵庫から食材を取り出し、手早く調理に掛かった。

風画お手製のチャーハンは、ものの数分で完成した。

「さあ、食べ」

風画はチャーハンをテーブルに運び、手のひらを上に向け両手の突き出した。

「でわ」

槍牙は軽く合掌してから、チャーハンに蓮華を突っ込んだ。  
蓮華に収まったチャーハンをゆっくりと口まで運ぶ。

「どうよ？」

風画は槍牙に訊いた。

「うん。美味い」

槍牙はそう言うのと、すぐさま二口目に入った。

「ところで、いきなり本題で悪いんだが、編集作業のことで相談がある」

風画は重々しく切り出した。

「……」

槍牙は風画の表情の変化を機敏に察知し、無言で蓮華を持つ手を休めた。

「編集作業のことなんだが、一筋縄で行きそうにない」

風画の視線は真っ直ぐに槍牙に注がれていた。

「と言うと」

槍牙は必要最低限口にした。

「これを見てくれ」

風画はそう言うのと、黒いボストンバッグを取り出し、テーブルの上に置いた。

「今日までの撮影に使ったフィルムだ」

槍牙は黙ってフィルムの山を見ていた。

「これと、更にこれだ」

風画はそう言っと、今度の白い紙袋を取り出した。

「練習試合のテープか」

槍牙がそう言っと、風画は黙ってうなずいた。

「ここにあるフィルムとテープと切って貼って一つの映画にする」

二人とも黙りこみ、両者の間を沈黙が支配する。

「確かに、一筋縄では行きそうにないな」

沈黙を最初に破ったのは槍牙だった。

「今夜は長いぞ。ちなみに、フィルムの提出期限は明日の午後四時だ」

風画が言った。

「徹夜ということだな」

槍牙の一言。

「ああ」

風画の返事。

互いに互いを見つめあう。

直後、固い握手。

かくして、『少林バスケ』の制作は最終章へと突入した。

## 第九幕 生還のクランク・アップと、本当の地獄（後書き）

風画と槍牙は モではありません。幼稚園時代からの親友です。ちなみに、風画の彼女は（知ってると思うけど）美奈です（この頃出番無いな〜）。

## 第十幕 現世への帰還（前書き）

長いので、急遽二部構成にすることにしました。

## 第十幕 現世への帰還

日曜日の映画館。

風画と槍牙はロビーのソファでぐったりとしていた。

「あつ！ ちょっと二人とも、大丈夫！？」

私服姿で映画館にやって来た美奈は、死にかけの二人に駆け寄った。

「おお……、美奈か……。よく来たな……」

消えかけの掠れ声で風画が言った。風画の目は焦点があっておらず、頬は異常なまでの竄れ具合だった。

「どうしたの！？ 大丈夫！？」

美奈の声は上擦っていた。

「ははは。いやー、昨日から不眠不休で編集しててな。ハハハはは羽hahA8」

槍牙が答えた。

「見よ」

槍牙はそう言うと、自販機の脇を指差した。  
するとそこには、空き缶入れに入り切らず、溢れ返った空き缶を山が築かっていた。

「何あれ？」

美奈はきよんとする。

「俺等の……、戦いの……、跡だ……」

空き缶の山をよく見ると、空き缶は全て缶コーヒーの空き缶だった。

「少し飲み過ぎたかな。必要以上にカフェインが効いて、眠いのに寝れない」

そう言う槍牙の見て呉れはかなり酷かった。

いつもなら丁寧に固められ、見事なまでのオールバックであるはずの頭は、乱れに乱れて垂れ下がり、落ち武者のようだった。

二人は右肩だけが異様に下がり、目の下には真っ黒なクマがあった。そのクマの黒さはかなりのもので、野球のデージェームで目の下にスミを塗っている選手のようなだった。

「ああ……、そうだ……。五時から……、俺等の……、映画が……」  
風画はそう言ったきり、そのままの姿勢で目を開けたまま動かなくなつた。

「風画くん……？」

美奈は風画の肩をさすった。

「此奴、また寝たな。どけ、そんなんじや駄目だ」

槍牙はそう言うと、スタンガンを取り出した。

「お目覚め」

槍牙はそう言うと、風画の眉間に当てたスタンガンのスイッチを押した。

「ウギヤアアアアアア！……！！！」

爆発的な大声を出して、風画は覚醒した。

「危ない……。寝てた……」

風画はまたもや固まった。

「放火」

槍牙は熊用の唐辛子スプレーの取り出し、風画の鼻の両方にゼロ距離噴射した。

「ぴぎやあああああ！！！」

本日二回目の覚醒。しかし、風画は目覚めることなく、逆エビ状態で固まったまま痙攣した。

「ハハハ。もう駄目だな。我々の作った映画はすぐに始まるから、楽しんでいくと良い」

槍牙はそう言うと、美奈に軽く手を振った。

「うん……、分かった……。風画くんは大丈夫なの？」

美奈は風画の顔を見た。

風画はリングの死体のような顔のまま固まっていた。

「問題ない」



「そう……、かな？」

美奈は些か不安だったが、とりあえず、ホールへと向かった。  
「ぶあくがあー！！」

ホールに行こうとした瞬間、この世のものとは思えない奇声。  
美奈が驚いて振り返ると、槍牙が風画に強烈なキヤメルクラッチをかけていた。

美奈がホールに着いたとき、ホールは人でごった返していた。

「あ。河合だ。おーい」

美奈に手を振ってきたのは、バスケ部の二年生で、相手選手に脳天ダंकを放った者だった。

「風画たちどうしてた？」

脳天ダंक男改め進矢が訊いた。

「ロビーで喧嘩してる」

美奈は他人ごとように言った。

「はは。あいつらもよくやるな」

進矢が呆れたように言うと、ホールにブザーが響いた。

「間もなく、今映画祭最終作品。『少林バスケ』を放映致します」  
澄み切った女性の声がホールの中で木霊する。

直後、ホールの照明が落ち、幕が上がる。

「いよいよだね！」

「あ、ああ」

進矢は何故か緊張していた。

（こうしていると、デートしてるみたいだな。ひひひ）

進矢の魂の叫びであった。

スクリーンの中央に『少林バスケ』の文字が浮かぶ。原作顔負けのレタリングが施された文字は、槍牙とバスケ部の一年生総出で作り上げたものだ。

「ほお、なかなか凝ってるなあ」

進矢が感心するもつかの間、客席のあちらこちらからざわめきが聞こえた。

「仕方ないよね、もとからそのつもりだったんだから」  
美奈がそう言った直後にタイトルがフェードアウト。  
体育館に向かって仁王立ちする男。

風画である。

数名の部下を引き連れた風画は、右の拳を左手で包み一礼して一括。

「押忍！<sup>オス</sup>」

風画の直後、風画の部下達も同じようにする。

『押忍！』

風画達は勇み足で館内へと入っていった。

館内では、対戦チームの選手が思い思いにウォーミングアップをしていた。

これは、いつもの練習風景の映像で、画面の端っこをよく見ると、少くしだけ風画が映っている。

（あ！ 風画クン映っちゃってる……）

美奈は少しだけ落胆するが、それに気付いたのは美奈だけだった。

「おお。槍牙だ」

進矢が小声で言った。

美奈はすかさずスクリーンに目をやる。

「……え……？」

スクリーン中央には、例の曲曲しい軍服を身に纏った槍牙が映っていた。

「微妙に似合うな」

進矢はポツリとこぼした。

「集合」

スクリーンの中の槍牙が、館内に散らばる部員を召集した。  
『ハッ！』

部員達は即座に返答し、槍牙の前で整列した。

それにしても、高校生離れした返事である。それもそのはず、返答のときの音声は、軍事映画から引つ張ってきたからである。

「元帥に向かって敬礼！」

チームのキャプテンと思いき部員が一括すると、他の部員達はそれに従った。

「貴様等の様な屑共に相応しい相手を準備してやった」

槍牙は持ち前の重厚感たつぷりの渋い声で言った。

『サー、イエッサー！』

部員達の返答。ちなみに、敬礼したままだ。（音声は転用で、役者は口パクである）

「勝て！ 此の一戦で貴様等の強さを轟かせろ！」

『サー、イエッサー！』

「そして！ 我等の名を愚民共に知らしめろ！」

『サー、イエッサー！』

「行けーい！！！」

『うおおおおー！！』

部員達は目の色を変え、闘志剥き出しで臨戦体制に入る。

「えげつな……。槍クンてあんな人じゃ無かった気がする……」

美奈は深く落胆した。

「でもまあ、はまり役だよなあ」

「はああ」

感心する進矢の隣りで、美奈は深い溜め息をついた。

美奈が落ち込んでいる間にも、スクリーンの中ではストーリーが進んで行き、威圧感あるアップのシーンに差し掛かった。

アップというのは名ばかりで、実際に行われていたのは軍隊格闘（転用）の組み手だった。

「うおー。すげえな」

妙に感心する進矢。

「でもこれ……。バスケの映画だよな？」

美奈は小首を傾げて進矢に訊いた。

「そうだね」

進矢はポップコーンを食べながら、素っ気なく答えた。

なんやかんやあって、やっと試合が始まった。

脚立を用いたジャンプボールのシーン。ここは風画の思惑通り、なかなかのものだった。

スクリーンの中の試合は順調に進む。他校との試合テープを編集したものなので、コートの中の人物がコロコロと変わるという事を除けばだが。

そして、この映画最大の見せ場がやって来た。

最終幕へ続く

## 最終幕 帰還直後の間もない昇天（前書き）

「シネ七」のラストです。くどくて長くてごめんなさい。読み終わりましたら、評価の方、宜しくお願いします。m（＿）（＿）m

## 最終幕 帰還直後の間もない昇天

ユニフォーム姿の風画にパスが回った。

赤く燃える火球を手中に収め、風画は力強く大地を蹴って虚空に躍り出た。

「おりゃあ！」

風画は熱く燃える火球をリングに叩き込んだ。      ファイヤーダン

クは見事に成功した。

「すげえ……」

進矢は言葉を失う。

試合は後半へと突入した。

状況は二四対二二で風画チームがリードしている。

後半戦にも派手なプレーのシーンをちよくちよく混ぜつつ、着実にラストへと向かっていった。

試合は第四コーターを迎えた。

第三コーターでは一進一退の攻防が繰り広げられ、状況は四五対四二だった。

そして、後半残り三分四二秒。

「来た。俺の出番だ。ながかった」

客席の進矢が口を開いた。直後、周りのお客さんからの冷たい視線。

「んもう、ばかばかり」

美奈は片手をおでこにつけて、大きくうなだれた。

ボコッ。

ホールに嫌な音が響く。

進矢の放ったダンクシュートが、相手選手の脳天を仕留めたのだ。

「てめえこの野郎」

相手チームのプレーヤーが進矢に殴りかかった。

それを皮切りに他の選手が乱闘を始め、控えの選手も参戦し、観

客も加わり（よく見ると、プレイヤー役の人）、審判やオフィシャルが暴れ出し、遂には監督までもが出陣し、何故か野球部の生徒も混じる。

体育館中に響き渡る怒号と叫喚。

画面はちよくちよく切り替わり、国会での与党と野党の乱闘、甲子園球場での阪神と巨人の乱闘、佐々木健介対大仁田厚、神風特攻隊が米軍の戦艦に突っ込む記録フィルムの一部、シベリアの平原での狼の狩りの様子等の映像がローテーションで映し出された。

乱闘のシーンでも、風画のこだわりは炸裂していた。

誰かが投げたボールは体育館の壁を突き破り、キック一発で数メートルは吹っ飛ぶ。

乱闘乱闘また乱闘。極めつけと言わんばかりに、スペインの牛追い祭りの映像も映し出される。

乱闘は激しさを増し、武器を持つ者まで現れる始末。

そして、何故か体育館が爆発する。

紅蓮の炎が体育館を吹き飛ばし、爆発の残火が瓦礫の山で炎々と燃える。

場面は切り替わり、スクリーンには小高い丘が映し出される。

その丘のてっぺんで対峙する二人の人物。

焼け焦げたユニフォーム姿の風画と、曲曲しい戦闘服姿の槍牙だ。無言で睨み合う二人の間に流れる沈黙を最初に破ったのは槍牙だった。

「言葉など要らん。来るが良い」

槍牙がそう言った直後、風画は雄叫びを上げて走り出した。

二人の距離がある程度近づくと、激しい格闘が始まった。

風画が殴り、槍牙が避ける。

槍牙が蹴り、風画がかわす。

互いが相手の隙を突き、その一撃によって生じた隙に決るような追撃を加える。

両者の実力は全くの互角。それ故に、一瞬の駆け引きが鍵を握る。

壮絶な拳の応酬にピリオドを打ったのは、風画の一撃だった。

風画の拳を急所に受けた槍牙は、その場で膝から崩れ落ちうずくまる。

「まさか、これ程までの漢に成るとはな……。見事なり、それでこそ我が息子！」

衝撃のカミングアウトに風画は驚きを隠せず、目を見開いたまま口籠もる。

「俺の……オヤジ……」

風画がなんとか言葉を紡ぐと、槍牙が口を開いた。

「そうだ。貴様は我が息子。我を越える漢だ」

「アンタを越える……？」

風画は戸惑いを隠せずにいた。

「そうだ。あの試合は、貴様を試す為のもの。我を越えられる漢たるやを試す為のもの」

槍牙は直立し微動だにしない。

「そして、貴様の強さは立証された。貴様は我を越えた」

槍牙はくりりと振り返り、風画に背を向けた。

「去らばだ。我が親愛なる息子、風画よ」

槍牙はそう言っ、崖に身を投げた。

「！？」

風画は急いで崖に駆け寄る。

崖の下は大波のうねる入江（合成）で、救出は不可能に等しかった。

絶壁の真下の入江に見入り、風画は泣き崩れた。

風画は顔を上げ、夕日に向かって声を引き絞った。

「オヤジイイイ！！」

夕日が風画の影を長く引き伸ばし、画面がフェードアウトする。

画面が真っ白になり、『完』の一字。

スタッフロールの最後に『監督 羽村直哉』と表示され、映画は終わった。



「まあ、素人にしてはなかなかの出来だったかな？」

進矢は適当な拍手を送った。

美奈は投げやりな進矢の態度に憤慨しそうだったが、他の観客が進矢と同じような拍手を送ってるのと、奇妙な疲労感に苛まれたので、人一倍大きな拍手を送るだけにした。

ロビーに戻ると、風画と槍牙が死人の様に倒れていた。

周囲には散々暴れ回った跡。

「もう。本当にばかなんだから」

美奈は悪態をつきながらも、風画と槍牙を起こした。

「ほら、行くよ」

美奈がそう言って振り向くと、目の前に大磯の姿があった。

「あれ、大磯先生？」

風画がそう言つと、大磯は無言で風画に歩み寄り、直後、熱い抱擁をした。

「白狼！ 俺は感動したぞ！ くう！」

大磯に抱きつかれた風画は、その余りにも強い圧力に昏倒し意識を失った。

大磯は次に槍牙に抱きついた。

「うおおお！ 感動したぞおお！」

大磯に抱きつかれた槍牙は、奇妙な薄ら笑いと涙を同時に出した。  
「槍クン。どこか痛いのか？」

美奈は槍牙を気遣い、声を掛ける。

「へえ、槍牙ってそっちの気があったのか」

進矢は槍牙を冷やかした。

「ははは。別にどこも痛くない。眠気で何も感じない位だ。俺が泣いているのは、やっと楽になれるという事にだ。笑いもそのせいだ。俺は決して同性愛者では……ない……」

槍牙はそう言った直後、何かの使命を果たした様な顔をし、深く長い眠りについた。

ドサッ。

「キャー。二人とも、しっかりして」

慌てふためく美奈を横目に、進矢は119番をプッシュした。

「あー、もしもし。救急車二台、大至急。場所？ ああ駅前の映画館です。状態？ うーん、極度の疲労と睡眠不足と外部性ショックですね。死にかけなんで急いでね」

かくして、風画達の波乱に満ちた七日間は幕を閉じた。

## 最終幕 帰還直後の間もない昇天（後書き）

最後まで読んでくれてありがとう（＾o＾）／ 本当は七話で完結するつもりだったんだけど、思い付きで書いてたから上手くいかず、11話までいってしまいました。長い割には適当な内容でごめんなさいm（| |）m あと、評価の方宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1881a/>

---

シネマ七日間地獄

2010年10月8日15時46分発行